



- P2 介護業界の10年後を見据えて
- P4 第11回総会を開催しました
市民シンクタンクひと・まち社の調査活動

2012年5月25日発行（季刊）

特定非営利活動法人 市民シンクタンクひと・まち社
〒160-0021 新宿区歌舞伎町2-19-13 ASKビル601
TEL 03-3204-4342 FAX 03-6457-6202

E-mail npo@hitomachi.org URL : <http://www.hitomachi.org>
郵便振替口座 00170-6-410791 市民シンクタンクひと・まち社

市民主体のまちづくり型福祉の実践

～生活クラブ運動グループ・インクルーシブ事業連合設立～

小林徹也（生活クラブ生協・東京 常勤理事）

少子高齢社会、人口減少、広がる格差、減り続ける世帯当たり所得、1000兆円に迫る国の借金、税収よりも多い国債発行額、増え続ける社会保障費、積立金の取り崩しが続く年金などなど…今の日本の社会が持続不可能であることを示すことをあげれば枚挙にいとまがありません。

制度は制度として、多くの人が豊かに暮らすベースとして持続可能なものを作り上げていく必要がありますが、地域で豊かに暮らしていくには今の社会の状況を見れば制度に頼るだけでは難しいことは明らかです。

地域には地域ごとに固有の資源があり課題があります。資源を生かし課題を解決することができれば…地域で豊かに暮らすことができます。今ある制度は活用するにしても、制度に頼るだけではなく、地域の中に自分たちでコントロールできる領域を広げていくことが、持続可能な地域での暮らしにつながっていくと考えます。

地域で豊かに暮らすために自分たちのコントロールできる領域を広げていくことは、おおぜいの地域の人たちが知恵と力とモノとお金を持ち寄って、地域のしくみづくりをすることです。このことを生活クラブ運動グループでは、市民主体のまちづくり型福祉の実践と掲げ、このたび地域に広げていくための中間支援組織として「生活クラブ運動グループ・インクルーシブ事業連合」を運動グループの共同で設立しました。

「インクルーシブ事業連合」の主たる事業は、中間支援事業と助成事業です。地域で豊かに暮らしていくための活動や事業を、知恵と力とお金で後押しするといったところでしょうか。後押しするにあたって、会員団体は専門性をフルに発揮します。

生活クラブと生活クラブが生み出した福祉の事業や活動を行なっている団体が、「インクルーシブ事業連合」の会員となっています。全部で12団体です。ひと・まち社も会員団体として参加しています。「インクルーシブ事業連合」におけるひと・まち社の役割として、「福祉サービスの第三者評価」「様々な調査・研究、研修・講座」などの活動で培った専門性や知識を、地域のしくみづくりに生かしていくことが期待されています。それともう一つ。「インクルーシブ事業連合」は、会員団体と市民サポーターで支える組織です。おおぜいの市民サポーターを集めることが、「インクルーシブ事業連合」を通じた豊かな地域づくりにつながります。この通信をご覧になっている方は、ぜひサポーターになってくださいね。

私はこのたびの総会にて、ひと・まち社の理事になりました。生活クラブで地域福祉の担当になって2年が経過したところです。福祉の経験は浅く日々勉強というところですが、福祉の事業や活動は刺激的で、有意義な日々を送っています。ひと・まち社と関わることでより刺激的は日々になるかなと期待しています。私のひと・まち社の理事の役割としてですが、東京や地域の生活クラブ運動グループが行っている活動や事業と、ひと・まち社の活動や事業をつないでいきたいと思っています。数多くつなぐことで、豊かな地域づくりをすすめていきたいですね。



介護業界の10年後を見据えて

～介護の現場をきらきらと輝かせたい！～

NPO 法人 もんじゅ理事 佐戸 義江

就職氷河期といわれる現在、それでも介護の現場ではなかなか職員が定着しないというのが現状です。人と人のふれあいの少ない社会の中で、介護の現場はまさに対人業務。日々の業務の積み重ねの中で疲弊する職員をどのようにサポートできるか。NPO 法人もんじゅは、介護現場を輝かせたい！と、現場で働く若い職員のキラキラを支援する活動を行っています。NPO 法人もんじゅのメンバーとして活動する佐戸義江さんにレポートをお願いしました。

3人よれば文殊の知恵

今年4月に介護保険制度改正で「介護職員処遇改善加算」がつくようになりました。介護職員の賃金が安いということで利用者にも負担してもらい、少しでも賃金を上げようというものです。賃金は安いよりも高いほうがよいのは当然のことですが、介護職員が離職する理由には、賃金以外に職場環境が大きいとされています。

一般の会社と違い介護事業所は実年齢と経験年数が逆転していたり、様々な職歴や資格を持っている人が集まっているというのが現状です。いろいろな考えの人が集まっている事は決して悪い事ではありませんが、職場の方針が明確でない場合などには、どこに向かって行ったらよいのかわからなくなってしまいます。

2010年夏、介護事業所の経営者の3人が介護業界の10年後について語り合った時に、「自分自身が若くて壁にぶつかっていた時には、こんな話をする相手はいなかった」「話を聞いてもらっているうちに、自分の中にある考えが少しずつ整理されていく」ことを実感し、“人に話すこと”“話して考えを整理すること”“そこで見えてきた事を実行すること”簡単そうでなかなかできないことだけど、それができれば希望になると感じたそうです。自分たちは20代の頃に描いていた理想の介護現場があった。でも、先輩職員に言われるままのことしかできなかった。仕事に追われて疲れて辞めていく同僚を何人も見送ってきた。30代後半になり責任のある立場で仕事を任されている今なら、壁にぶつかっている若い職員のバックアップができるかもしれない。『3人寄れば文殊の知恵』が生まれる！そう考えたのです

たまたまこの3人のうちの二人とは以前から親交があり、この話はすぐに私のもとにも届きました。経験の長い職員が経験の浅い職員の話聞き、自らの力を引き出せたらどんなにステキかしら！このプロジェクトに参加するのに考える時間は要りませんでした。こうして「NPOもんじゅ（現：NPO法人もんじゅ）」が立ち上がりました。

もんじゅミーティング

「もんじゅ」の活動の軸になっているのが「もんじゅミーティング」です。これが、前述の3人寄れば文殊の知恵の部分です。悩みを抱える現場職員1人が、職場以外の社会人2人の力を借りて答えを見つけます。答は自分の中にあると信じて、決してアドバイスはしません。自分の中にある悩みを整理して、どうありたいかを明確にします。そして、それを実現させるために、自分自身が何をすべきか考え行動します。その結果がどうであったか検証して、更なる目標に向けて動き出していけば、スキルは向上していきます。必ずしも上手くいくとは限りません。それでもチャレンジしたということは、大きな力です。どうして上手くいかなかったのか、他の方法はなかったかなど、もう一度検証して取り組むことができます。

職場の中でこれができるのであればいいのですが、最初に話したように離職原因の多くが職場環境なのです。つまり、悩みの多くは自分の職場に潜んでいることが多いということです。だから、全く利害関係のない人に聞いてもらう仕組みを作っています。誤解のないよう付け加えておきますが、職場の悪口大会をしているわけではありません。以前からの慣習で行っていることに疑問を感じて問題提起してくる人はいますが、それはよりよい介護を目指したいという気持ちから考えていることで、「もんじゅミーティング」に申し込んでくる人は、とても熱い気持ちの持ち主が多いです。若い職員の熱い気持ちを聞いていると、自分も昔は…と忘れていた何かを思い出したりもします。

この「もんじゅミーティング」で話した内容は、報告書にまとめて事務局に提出します。同じような悩みを抱えている職員の参考になるよう、分類して誰でも見られる形にしていくことを考えています。全国各地で行われた「もんじゅミーテ



鹿児島での「もんじゅミーティング」

イング」の報告書は、既に 100 以上集まっています。全国各地と急に話が大きくなりましたが、事務局メンバーがこれまでに繋がっていた事業者団体やブログなどを通じて、全国各地からの問い合わせに応じて説明会と体験をしてもらうために出かけしていきます。こうした活動の中から「もんじゅ」のプロジェクトに賛同した人が会員となり、今では各地で開催されるようになりました。

東日本大震災の介護現場を後方支援

この全国に仲間がいるということが、あの東日本大震災の時の支援にも大きな力となりました。事務局メンバーは、いち早く物資を集めて宮城の仲間のもとに駆けつけました。震災直後は介護用品を必要としていた被災地も、1ヶ月が経つ頃には介護する側の着替えや生活用品が必要となっているという情報が入り、次はそれを持って訪問しました。その時だけの支援で終わらないよう、連絡を取り合いながら活動を続けています。



高齢者施設の中はまだ泥が
たくさんありました

NPOもんじゅの取組は現地の介護職や現場職の後方支援です。公的支援では物資も情報も行き届かず困窮している被災地末端の高齢者などに対して、現地の現場職がアセスメントを行い、必要な支援を柔軟かつ迅速に行えるように、物資・情報・資金・人材・活動計画ミーティング（もんじゅミーティング）等



仙台での「もんじゅ
ミーティング」(上)

アセスメント(左)

を提供するものです。現地の現場職との「もんじゅミーティング」では、放射能の不安、長期化するストレスの中で避難するべきかどうかを悩み、残された高齢者の生活を

支え続ける使命感と不安に揺れ動く介護職としての葛藤が吐露されました。日を追うごとに人々の心身の疲弊はつり、人はだんだんと減っています。けれども、要介護者は増えています。「ここに住んで介護している自分たちがやらなければならないこと」を揺れる思いを抱えつつも覚悟する被災地の現場職の姿を見つめながら、NPOもんじゅは、被災地の現場職が、被災により様々な生活困難を抱えている現場の高齢者に柔軟かつ迅速な支援をするための後方支援を、全国の現場職の想いを紡いで届ける活動を続けていきたいと考えて活動しています。

10年後の輝く介護現場へ

こうして人の繋がりが徐々にできてきていますが、介護業界はまだ未熟です。対人援助を業としていなが

ら、自分たちの意見交換やスキルアップができていません。介護従事者の処遇改善は金銭的なことだけではなく、意欲のある職員をバックアップする仕組みを作ることが必要だと考えます。自ら考え提案できる人材を増やしていくことで、10年後の介護業界に明るい未来が見えるのではないかと考えています。



みんなが“キラキラ”できる職場を!

現場職員の、現場職員による、現場のための問題解決を!

NPO 法人もんじゅの3つのミッション

- その1. 先輩と後輩が対話し双方ともに良質な気づきを得ます。対話を重ね、気づきをカタチに変えていきます。
- その2. 現場スタッフが起こしたアクションとその結果や振り返りをWEBに蓄積しナレッジシェアを実現します。
- その3. 対人業務を行っている現場スタッフの問題解決力を高め、10年後の業界イノベーションを起こします。

NPO 法人もんじゅの活動内容

もんじゅとは、悩みを抱える現場職員さん一人と自分の職場以外の先輩二人の計三人でセッションして答えを見つける、というもの。

先輩は後輩をモチベートし、時にコーチングやファシリテートを行うことで、自分の中にある問題意識や理想と現実のギャップに気づき、その目指すべきものに向かう第一歩を踏み出すアクションプランを宣言します。その宣言はもんじゅ報告書として書面化されます。

「答えはみんな自分が持っている」ってことなんです。見つけた答えを持ち帰り、職場の直属の上司と相談し、実践します。その結果、何が起きて、問題は解決されたのか、新たな問題が出てきたのかを検証し、当法人に報告をしてもらいます。

それをファイルとしてサイトにいっぱい蓄積して全国みんなの共有財産としておおいに活用します。サイトは誰でも見ることが出来ますので、全国の現場で起こる問題解決案が蓄積されます。

NPO 法人もんじゅ東京支部 Blog : <http://ameblo.jp/npo-monju/>



